

詠む広場

毎日俳壇

片山由美子 選

子犬の名問ふや日傘をさしかけて

芦屋市 水越 久哉

△評▽ひとり遊びをしている子どもに、子犬の名まえを尋ねた女性の姿が目につく。「日傘をさしかけて」がやさしい。

木屋町の水の匂へる麻暖簾

千葉市 島山さとし

△評▽高瀬川に沿う京都の木屋町通りには老舗の飲食店などが並び、麻のれんが涼しげである。

大粒の雨が斜めに立葵

長浜市 中島 正則

玄関にきのふと違ふ蝸牛

松阪市 奥 俊

初夏の空を映して子牛の眼

福島市 渡辺 俊子

汗とつと最終バスに乗り込みて

平塚市 門脇 明子

枇杷熟る岬を巡る路線バス

横浜市 荒木 久子

朝顔市売物でなき一鉢も

奈良市 梅本 幸子

風を切る音のまぶしき夏つばめ

前橋市 木下美樹枝

紫陽花の陰に隠る猫のあて

名古屋市 初夏みどり

小川 軽舟 選

人生に使ひ倒され藤椅子

伊賀市 福沢 義男

△評▽働きづめの人生だったのか。今は藤椅子で静かに振り返る。人生に使ひ倒されたという詠嘆が強烈な印象を残す。

梅雨寒や家裁にひらく遺言書

東京 関口 昭男

△評▽故人は何を書き残したのか。固唾をのんで見守る緊張感が季語にも表れている。

虹消えて歩き出したる三人

つくば市 吉田 潭楓

湿原より戻れば宿の夏煙燃ゆ

横浜市 宮崎 一風

ほうたるや水脈ながながと屋形船

福津市 瀧 あき子

子燕や親につつかれ巣立ちけり

北九州市 田中 裕子

バス停へ君と走った夏の雲

京都市 小林 香織

噴水や赤子の眠る乳母車

東京 山本こうし

バイクテントコッヘルスキットル夏の月

横須賀市 浅井 耕作

本堂に涼風通り半夏生

仙台市 川合 進

西村 和子 選

山小屋を踏み破りたるはた神

枚方市 門川 清秀

△評▽落雷によって壊滅した山小屋を描くのに、「はた神」のしわざと表現したのが効果的。「かみなり」の語源に思い及ぶ。

諦めの声洩らしたり梅雨鵲

大阪市 立川 六珈

△評▽作者の心を反映して、ああ今日も雨かと言わんばかりのカラスの声が聞こえてくるようだ。

いつ見ても平和そのもの蟻地獄

茅ヶ崎市 古田 哲弥

空を見ず海を見ぬ子の磯遊び

奈良 龍本 澄子

入相の鐘の音濡らし五月雨

浜松市 久野 茂樹

打ち水やついでに路地の鉢植も

土浦市 今泉 準一

新茶汲む茶請けは京の塩昆布

東京 徳原 伸吉

ひと粒の雨に乱る蟻の列

大阪市 吉田 昌之

真夜中や新樹の風の吹くばかり

岸和田市 板原 克介

目を清めたり紫陽花の花手水

浜松市 野畑 明子

井上 康明 選

アメ横はアジアの匂ひ夕薄暮

東京 徳原 伸吉

△評▽東京・上野のアメ横には、アジア各地の食材の匂いが漂う。初夏の汗ばむような夕暮れは、その活力にふさわしい。

千年の風の中なる夏祭り

真岡市 小川 充

△評▽夏祭りは、葵祭を想像した。京都市中を進む平安絵巻の行列に、千年を経て不変の風が吹く。

熱風や東京行の深夜バス

日進市 伊藤 清也

箱庭の池に木の椅子置きにけり

野田市 塩野谷慎吾

時の日や漏刻といふ水時計

越谷市 安居院半樹

さみだれや中洲に残るシヨベルカー

長浜市 中島 正則

眼の高さから取り始め杏の実

北杜市 小松 俊隆

千体の仏の静寂花擬玉珠

加古川市 伏見 昌子

花柏樹友の入院長びきぬ

茨城 杉山 満

妹の小さき顔やサングラス

北名古屋市 月城 龍二

水原 紫苑 選

青嵐止まばピアノの質量に宇宙は潰れあたりはせぬか

東京 吉岡 耕大

△評▽宇宙に匹敵するピアノ、それは単なる楽器ではない。青嵐が必死で抑えているピアノの力。黒と白のキーは新しい言語である。

あからさまに顔をむけつつ人間の心に棲まふ天使と悪魔

米川千嘉子 選

平和博愛の祈りを奪われて△はやくわ△という名札をも

四日市市 早川 和博

△評▽未来への祈りを込めて付けられた名前を知られることなく、姓だけが平仮名で。自分の存在自体が記号化されたよう。

真夜中も車途絶えぬ街道を赤子のような夫の手を引く

加藤 治郎 選

雲ならばお好きなときに好きなだけ「ラン」「ラン」「ラ

「ラン!!……」と霞のとおり! 相模原市 内山 佑樹

△評▽雲は自在である。空を走る。ランという指令は断片化して風に舞っているようだ。結句は雲の魔法のような言葉である。

むかし見た「チロリン村」となるみの木」今どこにあるチ

<歌集>

新刊

<句集>

◇依光陽子『ふ、は鳥に』 作者の角川俳句賞受賞から28年。帯文にある通りまさに渾身の第1句集。△見てゐたる星が動きて天の河△△歩くこと蝶にもありて秋日和△。言葉が軽やかで、対象への認識や把握が独特で面白い。△おほかたの記憶は消えて春帽子△などの少し切ない句にひかれた。(左右社・2640円)

◇鶴田智哉『高屋窓秋の百句』 解説付きの百句シリーズの新刊。作者は今井杏太郎門出身で窓秋と直接的なつながりはない。それでいて本書はこれ以上ない組み合わせに思えた。作者も窓秋と同じく白のイメージが似合う作家だからだろう。△頭の中で白い夏野となつてゐる△などの誰もが知る名句を、予定調和の解説ではなく自身の言葉で語っているところに好感が持てる。巻末の小論は鶴田ファン必読。(ふらんす堂・1650円) (俳人・西村麒麟)

◇福島泰樹『下谷万年町物語 唐十郎篇』 第36歌集。坂本小学校(東京都台東区)の閉校の日に母校が同じ唐十郎をゲストに短歌絶叫コンサートを開催。2人の原点ともなった万年町を哀惜する。△坂本小学校閉校の日や理科室で酒を喰らいき唐十郎と△(晶文社・3300円)

◇米川千嘉子『スナバコノキ』 2022年から25年までの作品を収録した第11歌集。歌集題は木の名前である。母の老い、夫の病に直面した日々をこまやかに詠む。△たつぷりと指を濡らして桃をむく身体性を母はうしなふ△(角川書店・2970円)

◇千坂麻緒『the new new』 第1歌集。歌のリズムがよく、そこにほのかな寂りようが感じられる。△テテテと地面を駆ける鳩たちよいつまでも地を見てゐる我よ△(典々堂・2420円) (歌人・中川佐和子)

お休みし、他の
ご掲載します。

います。

会賞—鈴木牛後『郎
、対馬康子『百人』

『中根誠「墓碑銘」
2025年8月号』



こちらから
投稿できます